

**A
Bloody
Newspaper
or
a
Kitten
or
the
World**

—— Tokyo Neko-jin Blueberry ——

血まみれの新聞、または子猫、もしくは世界

日曜日の朝、僕の住むマンションの一階エントランスにある郵便受けに、血まみれの新聞が届いた。

「うわっ」

僕は驚いて、さっきコンビニで朝食用に買ってきたメロンパンとインスタントコーヒー（詰め替え用）が入った袋を落としてしまった。

まいったなあ、いやがらせか？

しかしよく見れば、血まみれなのは新聞そのものではなく、写真の中の子猫であった。

「なあんだ」

僕は安心して袋を拾い上げて、新聞を手にとった。

僕の家はマンションの6階なので、エレベーターに乗って6階まで。

「あ、すみませーん乗ります」

僕が「6」のボタンを人差し指で押して、親指で「閉」を押す直前に若い女性が駆け寄ってきた。

ちっちゃくて可愛らしい人だったので僕は「開」をグッと押して彼女が乗り込むのを待った。

エレベーターは僕と彼女を乗せて上昇。　彼女は「4」のボタンを押した。

僕は右手で袋を持ち、新聞を脇に抱えながら、「6」と「4」だけが発光する数字を眺めていた。

「きゃっ」

彼女が小さく叫んだ。

「えっ、、、どうしました？」

「ち、」

「ち？」

「血まみれ……」

彼女は恐る恐る僕の新聞を指差す。

「ああこれ？ 僕もさっき驚いたんですよ。でもよく見てください。ほら。血まみれなのは新聞じゃなくてこの子猫なんですよ」

「そうですか……」

「うん、そうなんです……」

沈黙。

エレベーターが2階で停まり、ロリィタな少女を乗り込む。

ロリィタは3階で降りる。

階段使えよ、君はまだシンデレラじゃないのか。

4階。

彼女は扉が開く直前に「でも……」と口を開いた。

「はい？」

「でもですね、血まみれなのが新聞であろうと写真の中の子猫であろうと、世界の何処かで血が流れた、その事実には変わらないんじゃないですか？」

「……」

「なんていうか、、、届いた新聞が血まみれだったら驚くのに、写真の中の子猫であれば「なあんだ」と思ってしまう。読者がそんな感覚で読むのであれば、新聞に限らず報道、ニュースの存在価値は失われますね。事実をフィクションのように見せてしまっているのですから、むしろ害ですよ」

少しヒートアップしてしまった彼女はハッと我にかえるような顔をして、最後に、すみません、と言ってエレベーターを降りた。

扉が閉まる。

僕は呆然と立ち尽くし（それでもエレベーターは上昇する）、開いた扉からエレベーターを降り、自分の部屋に戻った。

僕はテーブルの上に新聞を広げ、記事と呼ばれる言葉をなぞり読んだ。

この新聞が血まみれであることを強く意識しながら。

それでもやはり駄目だ。

この灰色の舞台は、常に何かは抜け落ち、削ぎ落とされているような気がしてならない。

だってほら、僕の手はきれいなままだもの。

その手でメロンパンだって掴めてしまえる。